

ロシアは今

諫早勇一

(大学言語文化教育研究センター教授)

大学より在外研究を許されて、昨年三月末モスクワにあるロシア連邦科学アカデミー世界文学研究所を訪れてから、やがて一年が過ぎようとしています。ある外国人向けのガイドブックにロシアを訪れる一番の楽しみは、激しく変化しつつある国に身を置けることだとありましたが、確かにこうした体験は伝統あるヨーロッパの国では味わえないものかもしれません。そこで、以下思いつくままに、けっして豊かとはいえない私のロシア体験の一端を綴らせていただきます。

私たちはこれまで教室でモスクワとペテルブルグを対照しながら、ペテルブルグは西欧的な町、モスクワはロシア的な町と繰り返してきました。確かにそれには歴史的な根拠があります。しかし、現在のモスクワは果してロシア的な町と言えるでしょうか。今では多くの人たちがモスクワを見ただけではロシアはわからないと語っています。時にはモスクワはもうロシアではないとさえ。

昨年末モスクワのペトロフスキ・パサージュという(すっかり西欧的な雰囲気につくりかえられた)デパートの一隅にケ

ンゾーの店ができたというニュースを新聞で見かけました。そういえば、昨年春には新装なったナツイオナリーという伝統あるホテルに、「世界でもっとも高価なレストランの一つ」マキシム・ド・パリが開店したのも話題を呼んだはずです。観光客でにぎわうかつての国営百貨店「グム」が西欧のブランド商品で客を呼んでいることは既によく知られていることですが、こうした西欧化現象は着実に広がりつつあります。金さえ出せば西欧の一流ブランド品がモスクワで手に入る、そんな時代がやってきたのです。

ただ、こうした西欧化現象の中で最近とくに注目され始めたことがあります。それは端的にいえば、これらの店のターゲットの問題といえるかもしれません。従来これらの店は(日本人を含めた)欧米人を客として想定していました。食料品店を例にとれば、モスクワで有名な外資系スーパーマーケットのストックマン、サトコなどが日本食コーナーを設けているように。しかし、この一年をふりかえただけでも、急速にロシア人が客として進出し始めたことが実感として感じられます。何十万、

何百万ルーブル（日本円に直せば何千円、何万円ですが）という現金をこともなげに支払っていくロシア人客の姿（ロシア人の間にまだクレジット・カードは普及していません）は今では珍しくありません。

もちろん、ロシア人が自分の国の店で買い物をするのに何の不思議もないわけですが、平均月収が日本円にして一万円に満たないと言われるこの国ではこうした現象はやはり奇異に感じられます。一方には大学教師の一月分の給料にも当たる額で無造作に高級下着を買っていく若い女性たち、他方には思い思いの品物を手に駅の近くに並ぶ立ち売りのおばさんたち、ロシアは今世界でも最も貧富の差の激しい国の一つだと言われるのもうなずけます。そして、この貧富の格差に憤った年金生活者ら貧しい層が、十二月の下院選挙で共産党を躍進させたことも理解できます。

しかし、ロシア全体ではまだわずかも、モスクワに焦点を絞って考えれば、富める層は目に見える割合を占めてきたようです（実際モスクワでは共産党は得票率第一位を占めてはいません）。その現れがこれまで外国人客中心だった店へのロシア人の進出であり、それはある意味で外国人の駆逐にもつながる可能性を秘めています。

ロシアと外国企業の合併によるスーパーマーケットは現在いくつもありますが、その最も早いものの一つがノーヴィ・アルパート通りのアイリッシュ・ハウスでした。ところが昨年その店からアイルランド側が手を引くという事件がおきました。他にも経営権をめぐるロシア側と外国企業がもめているという

噂はよく耳にしますが、やはり基本的な流れは、西側から商売のノウハウを手に入れたロシア側が、もう自分たちだけでやっていけると主張し始めたところにあるようです。ロシア人のニーズは自分たちの方がよく知っているし、もうロシア人は十分な購買力を身につけた、だから後は自分たちに任せなさい、それが彼らの言い分でしょう。そして、外資系スーパー顔負けのロシア系スーパーが次々とモスクワに誕生しつつあります。また、昨年マクドナルドが店を構えるプーシキン広場の近くに「ルースコエ・ビストロ」というファースト・フードの店が開店しましたが、その売り物はクワスやピロシキ、つまりシステムは西側から学んだものでも、商品はロシア伝統のものというわけです。ロシア人は案外日本人のように他から学んだ知識を応用する才にすぐれているのかもしれない。

こうしてモスクワの町は急速にその姿を変えつつありますが、その変化はまだモスクワという町に限られているようです。モスクワはロシアではない、そう言われるのはこのためです。しかし、このモスクワの西欧的なきらびやかさを自分のものとするためには、何よりも「金」が必要です。ではその「金」はどうしたら手に入るでしょうか。

友人のエレーナさんは若者たちが近年高等教育をないがしろにし始めたと言ってくれました。彼らの目から見れば、わざわざ大学に進むより、なるべく早く金を稼いで、外国車を持ち回り、高級レストランで彼女と食事をする方が魅力的なのでしょう。また、新聞記者のTさんは、今やロシアで「ものをつくる」産業はすっかり衰退してしまったので、理科系の大学を出ても

よい就職口はない、英語力を養って外資系の「ものを売る」企業に勤めるのが一番手つとり早い方法だと教えてくれました。そういえば、知人のワリーヤさん宅にお邪魔した時、小学校に通う子供たちがフランス語を習っていると聞かされ驚いたことがあります。しかし、こちらの驚きに対してワリーヤさんは、いや本当は英語を習わせたいのですが、英語の先生がいらないんです、みんな教師よりもっと稼ぎのよい職に変わってしまうので、と真相を打ち明けてくれました。月給が一万円にも満たない学校教師のストライキやモスクワの学校で英語教師が不足していることは新聞で知っていましたが、まさにそれを実感させられた次第です。

しかし、確かに外資系の企業に勤めれば、休暇にはヨーロッパ旅行に出かけるような贅沢は味わえますが、まだ外国車乗り回すほどの贅沢はできないでしょう。本当の「ニュー・リッチ」になるためには、「ビジネス」を自分(たち)で始めることが必要です。ロシア人得意の「カーペットの下の預金」に目をつけて、安全に金を保管するビジネスを始めて財を築いた話がある新聞をにぎわしていましたが、激動期を乗り切って成功するためには年齢も学歴も関係ありません。現在のモスクワは若者たちにとって、才能次第で成功を導ける恰好の舞台なのかもしれません。

とはいえ、当然こうした激動の波に乗れない人たちもいます。それは何よりも年金生活者らのお年寄りでしょうが、学者たちの大半もその中に数えられるでしょう。知人のサーシャさんは今や五つの企業を経営している数学者の話をしてくれました

が、あくまでもそれは例外で、私の知る学者たちの多くは、いろいろなアルバイト探しにインテリとしての自尊心を傷つけられながら、研究が続いています。現在のロシアは一面でインテリ受難の時代なのかもしれません。

金が人の価値観の中で大きな割合を占める時、人は計算的になり、しばしば人間関係は乾いたものになります。でも、ひとたびモスクワを離ればロシア人伝統の「ゴスチエプリイムストヴォ」(客に対する歓待好き)はまだ健在だというスヴェトラーナさんの誘いで、昨年夏私はヴォルガ河畔のサマールとトリアツクの町を訪れました。そして、実際そこでは昔からのロシア人の気持ちの温かさを実感として体験することができました。初対面の客に寝室を明け渡して、自分たちは居間に寝る老夫婦。愛用のジグリ(昔からあるロシアの小型自動車)をほめられてうれしそうに町を案内してくれる若者。家族の誕生日だからといって、突然の訪問客たちにテーブル一杯の御馳走をふるまってくれるおかみさん。文学博物館でいかにも楽しそうに解説してくれた初老の教授。さらには、別荘のサウナ風呂と一緒に裸で案内してくれた彼ら、それらは私にとって貴重な体験でした。実際モスクワに暮らしただけでロシアがわかるはずもないでしょう。

一年足らずのロシア生活ですが、まだまだ書きたいことはたくさんあります。でも、最後はやはり多少自分の専門に近い話、演劇の話(日本人が見に行くのはたいいオペラかバレエですが、ここではドラマについて)で締めくくりましょう。

ロシアのテレビ番組を見ると、そこにロシアのテレビド

ラムが欠落していることに気づきます。ロシアのバラエティ番組はあるのですが、連続ドラマはほとんどみな外国の作品（中でも南米のものが目につきます）で、日本のようなトレンド・ドラマもなければ、二時間ものの単発ドラマもありません。おそらくそのためもあるのでしょうが、今でも演劇はロシアの若い世代の間に根強い人気を保っていて、劇場を訪れるとたいいていロビーは若者たちでごったがえしています。ドラマを専門にする劇場はモスクワだけでも何十もありますが、ロングラン方式はとっていませんから、基本的に毎日各劇場の出し物が変わっていきます。そして、情報誌で眺めただけでもそのレパートリーの多様さは驚くばかりです。シェークスピアやモリエールのような有名な劇ならまだしも、ほとんどは題名だけでは内容の見当もつきませんから、ドストエフスキやゴーゴリといったロシア文学の巨匠の作品に材を取ったものから選んで見に行くことにしました。

面白いことにドストエフスキの長編小説はほとんど劇化されています。しかし、「悪霊」や「白痴」を三部九時間もかけて演じる類のものはやはり見る者を退屈させます。それより印象に残ったのは小説をベースに独自の切り方をした作品でした。たとえば、「罪と罰」をもとにした「〈罪〉からのK・I」という奇妙な題名の劇は、「罪と罰」の主人公ラスコニコフも女主人公ソーニャも登場させず（主人公のセリフの中で触れられるだけ）に、ソーニャの父マルメラードフの後妻カテリーナ・イワノヴナ（K・I）が夫マルメラードフの通夜に客（すなわち観客たち）を呼ぶという内容で、子供たち三人は登場して

いるものの、ほとんど一人芝居に近いものでしたが、劇場のロビーや小部屋を使って、観客も参加させるような面白いものでした。また、「カラマーゾフの兄弟」の一部分を劇化した「明日は裁判」も劇場ではなく、演劇博物館の小さなホールを舞台に、主要人物による対話劇（アリョーシヤとイワン、イワンとスメルジャコフ、イワンと悪魔等）の形をとっていて、最後にアリョーシヤが観客に向かって語りかけるあたりに斬新さを感じました。いずれにせよ、どの劇を見ても、それぞれの劇場が各々の個性を発揮しながら、新たな実験を繰り返している様子がうかがえるようです。現在財政的な理由から映画制作はいろいろな困難にぶつかっているようですが、小回りのきく演劇にはまだまだ奔放な活躍が期待できるのではないのでしょうか。マイナス二十度にも迫る冬の寒さをもとめせずに劇場に通う若者たちがいる限りは。

ヒマラヤ・トレッキング

古市 剛

(国際中学・高等学校教諭)

紀行文
68

昨冬はネパールで最高峰エベレストを遠望し、昨夏は氷河を歩きにパキスタン北部をトレックする機会をえた。ネパールへは大学山岳部で同期だった友人と二人づれだったが、私の方が標高五千二百メートル付近で、強烈な高山病にかかり急ぎ下山し、辛うじて難をのがれた。その冬は二人の日本人トレッカーが高山病で死亡した。最近はやりのトレッキングは登山と異なり、必ずしもピーク・ハントを狙わないし、また通常、本格的な雪山は対象としない。その意味で、この十一月の雪崩による大量遭難は二重に不幸だった。エベレストの近くの遭難場所では、私たちが通ったシェルパ族の故郷であるナムチェバザールの少し先から分岐して数日の地点で、とても他人事とは思えない。

冬にひどい目に遭ったのに性懲りもなく夏にも出かけた。今回は総勢九名だが、とても遠征隊とは呼べないので遠行隊（エントカイ）と名付け、言い出しっぺの私が隊長。全員同じ社会人山岳会に所属しているが、タクシー運転手、保母、外科医、大工など様々な人々との出会いが楽しい。行き先はパキスタン

のカラコルム・ヒマラヤ。カラコルムは東西二千五百キロもあるグレート・ヒマラヤの中でも、ネパール・ヒマラヤにつぐスケールがあり、世界の八千メートル峰十四座のうちの四座を占める。日本から続く「照葉樹林帯」に位置し、植生と風景が日本と似ているネパールに対して、パキスタン北部カラコルムは、何と言っても日本と全く違う風景、風土が大きな魅力だ。荒涼たる半砂漠の中の緑のオアシス、シルクロードの香り、山だけでなく村、街道、人々がとても新鮮で旅情を誘う。

一九九五年八月十一日、実感が伴わないままパキスタン航空（相変わらずサービスは悪い）機上の人に。北京を過ぎると間もなくゴビ砂漠の上空に達し、そしてチベット高原に。さすがに広大な中国、眼下には所々に村落や水路が道路に見えるものの、いつかはやってみたい陸路でのシルクロード横断の夢を砕くように、ジェット機で三時間近くも延々と不毛の砂漠が横たわる。以前に見たアメリカのアリゾナ砂漠に比すべくもないすごさ。中国の外交姿勢が時にデカイのも頷けるなんてつい思ってしまった。ヒマラヤ山脈をひとつ飛びすると、そこはパキスタンの

首都イスラマバード国際空港。私にとっては奇しくも未登峰ブリアンサール(6293m)遠征以来、二十年ぶりの訪問だった。初めての外国がパキスタンであったこともあり、私には思入れが強いが、数年前、多くのパキスタン人が日本で不法就労しているとかで、この国の名をよく耳にしたぐらいで、一般の日本人にはパキスタンと言っても、その場所すら曖昧で極めてなじみが薄い国なのではないか。しかし、モヘンジョ・ダロやガンダーラという名を聞けばすぐ思い当たるように、インド亜大陸五千年の歴史を受け継いでいるのは、インダス川に育まれたパキスタンであり、その意味で懐が深く興味の尽きない地域。いつものように、いわゆる「発展途上国」を旅すると、心地よい緊張と興奮のお蔭で、毛穴の開く音が聞こえてくるほど五感全体が張り詰め、元氣潑刺、食欲旺盛、体重が増える。余程、辺境地に向いているのか。初日から予定のホテルと違ったが、この種の地域の旅では文字通り予定は未定。結局、パキスタンでの九泊のうち、計画通りの宿に泊まったのはたった二泊だけだった。変化に適應できる柔軟な頭と心、そしてその変化を見てやろう、楽しんでやろうという好奇心が大切だ。

翌朝、ジェット機による二時間の山岳フライト、通称エアー・サフアリは天気もよく、悲劇の山ナンガルバルバット、世界第二の高峰K2などヒマラヤのジャイアンツたちが次々と碧空を背景に、手の届くような所に現れた。花嫁の峯チョゴリザ、サルトリカンリなど大昔、京都大学山岳部の先輩たちからよく話を聞いた山々もそびえている。もうこれだけで今回のエンコタの元を取ったような気がした。昼頃に大型のパンにゆったり

乗りこみ、いざフンザに向け出発。ガンダーラ最大の遺跡のあるタキシラの町を過ぎ、ポブラ並木のある街道沿いの村々を猛スピードで突っ走る。途中で二回、警察の検問があった。麻薬と大麻の取り締まりであり、所持していると厳罰になるそうだが、私たちの運転手がそれをやっているといううわさがあったが、真偽の程は分からない。やがてカラコルム・ハイウェイ(KKH)に乗る。これはサウジアラビアの資金援助と中国の人海戦術で完成したインダス河岸道路であり、これにより一九七一年にパキスタンのラワルピンディーと、パミール高原に位置するシルクロードの町カシユガルが、中パ国境クンジュラ峠(4700m)を経由して強く結ばれ、私たち外国人も比較的容易にこの地域に入れるようになった。とはいえ、中国、インド、旧ソ連、パキスタン、それにアフガニスタンの国境が間近に接し、軍事的にも重要な地点であり、トレッキング許可証があっても検問所でのチェックは厳しい。それにしてもこのハイウェイという言葉に騙されてはいけない。そこかしこで崖崩れありの、ガードレールなし。そして時々、羊や山羊や牛の群れのお通りあり。見下ろすと、目もくらむ氷河を溶かした黄土色のインダス本流の渦巻く激流。最近も大型トラックが川に落ちたが、沈んだきり車も人も一切消えたままだそう。見上げれば大岩壁が続き、アメリカのザイオン国立公園をも凌ぐ迫力がある。(これを見る前に、一昨年の秋に黒部峡谷の「下の廊下」に行っていたのは正解だった。いかんせんスケールが違う。)いまにも落ちそうな浮き石の山。その急峻なインダスの岸壁のただ中を細々と頼りなげに刻まれている旧シルクロード。それによつ



カラコルム・ハイウェイとインダス川



『地球の歩き方』より

て辛うじてつながっている小さなオアシスの集落。その印象的な風景と、ジェットコースターの何千倍も怖い身の毛もよだつ恐怖とで、まず二日間のドライブは飽きることは決してない。いくら疲れていてもコワクテ寝てられない。実際、車の前を大きな石がかすめた。岩雪崩だ。運転手はデコボコ路を一気に加速した。ズズーと車輪が滑り、インダス川に車がのりだした。間一髪、私たちがようやく通りぬけた箇所は一時間後に通行止

めになった。お陰で帰路は遠回りして、アレキサンダー大王の遠征時の砦の跡や、法顕、三蔵法師たちが訪れた時代の、磨崖仏などの多くの遺跡が残るスワート地方を巡ることができた。

インダス川からギルギット川へ、そしてフンザ川の河岸を行く。北杜夫の「白きたおやかな峰」ディラン（7273m）を眺め、そして道路から六千メートルの高度差がある秀峰ラカボシ（7788m）の雪壁に圧倒され、まもなくフンザの村グルミットに着いた。ここからクンジュラ峠までは約百キロ。ここで出会った大型トラックの運転手は、なんと八千五百キロかなたの中国の蘭州から、商売をしながらシルクロードを越えて来たという。かつて不老の地、理想郷シャングリラといわれたフンザは、一九七四年まで内政の一切がミールという藩王に任されていた自治王国だった。アレキサンダーの遠征軍の末裔といわれているためか、碧眼の美人を多く見かける。天才クライマー、長谷川恒男が雪崩で逝った末踏峰ウルタルⅡ（7388m）を背景に、断崖の上に建つバルチット城の周辺は、いまだに王国の雰囲気、桃源郷の趣を残している。グルミット村での私たちの宿はシルクルート・ロッジ。花が咲き乱れる前庭の彼方には鋸状のカールン・ホー山が屹立している。夕焼けが暗闇に変わると、空には満天の星。その中を人工衛星が飛んで行った。

八月十四日、いよいよトレッキングを開始し、パスー氷河に入る。カラコルムはネパールより緯度が高いために氷河がよく発達し、標高二千五百メートルあたりにその舌端がある。白く波打つパスー氷河の素晴らしい眺めと、簡易アイゼンを着けて

の氷河歩きの醍醐味（クレバス跳び、氷河上を流れる美味しいミネラル・ウォーター）を存分に味わった。白く長く蛇行するバツール氷河を見下ろしながらの昼食は、まさに天上の食事。ウルタル、パスー、シスパーレ、バツールなど八千メートル近い巨峰が目の前にある。五名のメンバーが軽い高山病にかかったが、全員が四千三百メートルまで登れた。夢のような景色は、かえって絵葉書にも似て非現実に見えた。ちょうど二十年前の夏、ボラダス谷を越えたすぐ向かいの山、ブリアンサル初登頂を果たしたことを思い出し、また当時の遠征隊の第一目標だったカンピレディオール峰（7143m）も望め、昔に戻れたような心の高揚を覚え至福のひとつときを持った。

三日間、私たちに付き合ってくれたのは、十三歳の少年からおじいさんまで混じった二十五人のフンザの村のポーターたち。夏休みでカラチから帰省中の医者やビジネスマン志望の大学生あり、地元の中学校の現役の先生ありといった具合だった。先生とその生徒たちが一緒にポーターのアルバイトをするなんて、日本では想像外のこと。日当は四百四十ルピー、およそ千三百円。その先生の月給が一万円だから、その日当は彼らにとって大きな魅力だ。それにしても、二十年前は一ルピーが三十円だったから、この二十年で日本円はますます強くなったことになる。ポーターたちはみんな陽気で、興にのればどこでも歌いかつ踊りだす。氷河のど真中で踊り出したのには驚いた。もちろん私たちも負けずに歌い踊った。中には露骨に物や金をせびるポーターもいたが、（テレビ番組の「世界ふしぎ発見」に出ていたハイ・ポーターだということで、信用したのが悪かつ

バスー氷河の横断

シスパーレ (7611m) の尖峰



た) これは私たちには所詮トレッキングであり遊びだけれど、彼らには仕事であるという立場の違いからくる。国が異なり文化が違うと誤解も当然生じるが、結局は、良い奴は良いし、悪い奴は悪い。問題はそれを見抜く力があるかどうか。旅といえども、その目的を果たし、忘れ難い思い出を残すには、豊富な国際経験に裏付けられた人を見る確かな目が必要だが、それがなかなか難しい。

この種の旅は、ある意味で苦勞を買いに行くようなところがある。まずまずのホテルでさえ、水が出るか、電灯がつくか、食べ物は大丈夫か、などなど、日本では不要の心配からすべてが始まる。だから、蛇口から水が出たといっちは喜び、ましてや熱いシャワーが使えるものなら単純に感激し、何か得をしたような幸福な気持ちになれるから不思議だ。日本の異常な清潔指向や便利さの代償に、私たちが失いつつある大切なものを発見できるとしたら、苦勞も苦勞でなくなる。パキスタンも当然、日々変化し近代化しているが、二十年ぶりに行ったラワルピンディーのラジャー・バザール(大市場)の混乱、喧噪、強烈な香料の匂いなどは変わっていないかった。ネパールのカトマンズと同じぐらいひどい車の排気ガスは何とかしてもらいたいが、その他は今のままの人間臭のある猥雑さを、いつまでも保って欲しいという勝手な思いを抱きつつ、八月二十日パキスタンを離れた。

若い生徒と常に付き合うのが仕事である教員には、旅はぜひとも必要です。できれば貧乏な一人旅。旅先で味わった異邦人の人恋しさを胸一杯に、また生徒と会えば最高ですね。